牲

三浦朱門

集英社

犠牲

一九七二年十月二十五日　初版発行
一九七五年八月　三十　日　七版発行

定価　八五〇円

著　者　三浦朱門

発行者　陶山　巌

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一

電話　二六五―六一一一
振替　東京　一五六五三

印刷所　大文堂印刷株式会社

検印廃止

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

©1972　S. MIURA

0093―771087―3041

目次

第一章　卒業　五
第二章　見習社員　五四
第三章　独立　一六一

裝丁　織田広喜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

犧牲

第一章　卒業

一

その日、明は従妹の雪子と土いじりをして遊んでいた。

明は中学二年だったし、雪子だって小学校六年になっていたはずだから、土いじりをするのには遅すぎはしたが、二人は半ば本気でその遊びに熱中していた。戦後も二年ばかりしかたっていなくて、遊ぶ玩具もなく、外は焼跡ばかりで、行ってみるほど面白い場所もない。それに、大人たちが集って朝から争ったりなだめたりし合っているから、子供である二人も、つい耳をそばだてて、座敷の動静をうかがいたくなる。

そこで進行していることは、子供の手に余る重苦しいものであることは、わかっていた。だから二人は、熱中できる遊びを見つける必要があったのだ。戦争の末期に雪子が疎開するまで、二人は近くに住んでいたから、よくこうやって砂いじりや泥遊びをしたのだ。だから何年ぶりかで会って

みると、昔のような遊び方以外に、二人は考えつかなかった。いや、何年ぶりとは言っても、明が母と一緒に米の買出しに行って、農家の倉で暮していた雪子を見かけたことはあった。そんな時の雪子はセーラー服の上衣に、飛白のモンペなどはいて、その服装、というよりも、都会人でなくなったことを、恥じるかのように、あまり明の前には出てこないのだった。

「田舎の学校どう」

「意地悪な子ばかり。東京の家どうなった?」

「焼けちゃったよ。あの手前の米の配給所からずっと、学校の方まで」

「そう」

雪子はピタ、ピタと素足の音をさせて、薄暗い倉の中に駈けこんだ。やがてノートを持って出てきて開いた。枯れた押花が紙の間から出てくる。

「コスモスよ。門のそばの。覚えてる」

「いや」

雪子はつまらなそうにノートを閉じて倉の中にひきこんで、もう出てこなかった。

雪子が疎開していたのは明の母の遠縁の家だったから、そんな風にして、彼女と会ったことが何度かあったはずだが、明には押花の記憶だけが残っている。雪子は明と一緒に歩いたりすると、ほかの子にいじめられるのか、明とは倉の入口で話をするだけだった。

そして雪子の母が突然娘を連れて上京してきて、雪子の父——つまり明の母方の叔父で、彼は東

京の社宅で同僚と共同生活をしていた――と明の家で言い争うようになると、彼は母に言われた通り、雪子の遊び相手になってやらなければならなかった。大人たちの話は興味はあったけれど、聞いてはいけないことだし、雪子の不幸につながる問題だという直観を明は持っていた。だから明はまず雪子を元の彼女の家の跡に連れだした。

丁度、新学年の始った季節で、昨夜の雨を吸った土が日に温められて、まるでイーストの発酵しかけているパン種のようにふくれ上り、香ばしい臭いを立てていた。焼け跡も丸一年もたつと、雑草が一斉に芽を出して、春の野原になっていた。

「ここがさあ、米の配給所さ。それが焼けた秤」

「精米の機械は？」

「どうしたのかなあ。屑鉄屋が持ってったのかなあ」

雪子の以前の家は生垣こそ痕形もなかったが、道より三尺ほど高い大谷石の垣と階段が残っていた。二人は敷地の中にはいり、青草の根方から、熱で変形した文鎮を見つけて、それに満足して帰ってきた。二人は文鎮と竹の棒と米軍食糧の空カンとで秤を作った。米屋の焼けただれた台秤が二人の意識の隅にあったに違いない。

「お砂糖、百グラム下さい」

「配給券は。あ、これはもう無効ですから、五十グラムになります」

明は机の引出しに数珠玉の実が二つかみほどもあるのを思い出して取ってきた。

「この真珠一粒でお砂糖一キロ売って下さい」
「だめですねえ。これは良質じゃありませんね。悪質ですわ」
「そういう時、悪質って言わないんだよ」
「いいじゃないの。遊びなんだから」
「でも悪質なんておかしいよ」
その時、座敷の方にあるざわめきがあって、その中から、雪子の母の琴子の甲高い声が聞こえた。
「雪子さん。帰りますよ」
雪子は握っていた数珠玉の実をポケットに入れるなり、玄関の方に走って行った。そして手や服を汚したことで、雪子を叱る琴子の声が庭にいる明に聞こえたので、彼は見送りに行かなかった。たった今、雪子と争ったばかりだったし、大人たちの前に出ると、土遊びの張本人として、彼が叱られると思ったのだ。
その時の気持としては、雪子はこれを機会に東京に戻ってきて、また元のようにいつでも会えるという感じだったのに、それっきり三年も会わなかった。琴子は明の叔父の啓吉と離婚したのである。ついでに雪子は明の本当の従妹ではなかったことも母から知らされた。
「琴子おばさんの前の旦那さんは、昭和十二年に戦死したのよ。そしておばさんは雪子さんを連れて、啓吉おじさんのお嫁さんになったの。だけど、琴子おばさんの家も、前の旦那さんの家も商売屋さんだったから、啓吉おじさんのようなサラリーマンの奥さんには向かなかったのね。だから雪

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

子さんは今まではあなたの従妹だったけれど、今は他人なんですよ。血のつながりがある訳じゃなし……」

しかしそう言われたからといって、雪子に対する親しみが簡単に吹切れるものでもなかった。一人子の明にとって、長い間、雪子は妹のようなものだったし、この一二年、性を意識するようになってからは、ひょっとすると、雪子と結婚することになるのではないかと、明は妄想することがあった。それは雪子にあこがれるとか、彼女に性的な昂奮を感ずるというのではなく、自分の気弱さを思うにつけ、彼が近づける異性は雪子くらいしかなく、そのために結局は彼女と結婚するより仕方がないのではないか、という気持だった。

琴子の兄は新宿の駅前マーケット――バラック建の闇屋街――で布地の店を出していた。彼女は兄の店の一隅で仕立てと、服の改造の仕事をはじめ、夜はその二階というよりも屋根裏の部屋で、留守番をかねて、雪子と寝泊りしていた。

何年か後になると、波に打ちよせられたゴミの山のような、薄汚なかった闇市は整理されて、広場になり、琴子は立退き料をもらって、独立の店を開き、その洋裁店は仲々はやるようになった。

明がそういうことを知ったのは、雪子と交際があったからではない。啓吉叔父は間もなく再婚して、明にとっては本当の従弟もうまれ、あの日以来、琴子母子のことを口にするのは、一種のタブーのような感じになっていた。しかし、明の母の友人で、啓吉叔父と琴子の結婚の仲立ちをした女がいて、彼女がたまに訪問してきたり、また彼女と明の母が電話でおしゃべりをしている時などに、

明はそういった断片的な知識を身につけた。

高校生になった明は、時には新宿に遊びに行くようになった。そして人波にもまれながら、この街のどこかに琴子おばの店があり、雪子が住んでいる、と思うことがあった。会いたい、というのではなく、そんな盛り場に知人がいるというのは、便利なような気がしたのだ。そしてパッタリ雪子と会うというようなことを夢想することもあった。

高校二年の秋、明は新宿の裏通りを歩いていた。楽器屋にトランペットの弱音器を買いに行った帰りに、人通りがすくないということのために、不断あまり通らない道を歩いていたのだ。

明はアルプ洋裁店、という看板を見た。いや、それよりも音楽の好きな明はその店の壁面に飾られた竪琴の装飾が目についたのだ。アルプ洋裁店という文字と、ＨＡＲＰＥという文字が見えた。フランス語では竪琴をあのように綴り、アルプと発音するのか、と思った。そして次の瞬間、ハープ、竪琴、琴、琴子おば、という連想がひらめいた。

これがその店かもしれない、と明は店の中をのぞきこんだ。しかし、琴子の姿も雪子も見えない。何人かの若い女が服を仕立てているのが見えた。婦人服の店ではあり、もし間違った時のバツの悪さを思うと、明にはとても扉を開けて中にはいる勇気はなかった。しかし、家に帰って考えれば考えるほど、その店は雪子の家に違いないという感じは明の中で次第に強くなってきた。そして、今度、新宿へ行ったら、必ず行って確かめてみようと思った。

しかし、今は親類でも何でもない琴子母子が、明をどのように迎えるかという不安があった。名

を名乗っても、白々しい顔で、
「では、いずれゆっくりいらっしゃい」
と言って追い払われそうにも思った。しかし、それならそれで、諦らめがつくという気もした。
「何の御用」
と言われる時のために、本を買おうとして、二十円くらい足らなくなったから、貸してほしい、という、もっともらしい用件も、明は用意した。五十円、百円というのは、物ほしげで、金をせびりに来た、という感じだが、二十円というのは可愛げがあってよい、と明は思った。
そうは思っても、明は二三度アルプ洋裁店の前を素通りした。そして、ある時、思いきって、というよりも、何度かそこを通っているうちに、抵抗感がうすれたのか、ドアを開けてはいってゆく勇気をかきたてることができた。
「雪子さん、いますか」
そう尋ねた時、明はいつの間にか、ここが琴子おばの店で、雪子が住んでいる所だと確信しているらしい自分を、不思議にさえ思った。
「雪子ちゃーん、ボーイフレンドよ」
ミシンに向っていた若い女が二階を向いて叫んだ。店の中には、木綿布地の糊のにおいがプンプンして、それがまるで揮発性の薬品のように目にしみた。
階段はどこにあるかわからなかったが、思いがけないほど近くから、突然、雪子の顔が見えた。

雪子といっても、額から目にかけては昔と同じだと思ったが、鼻、頬、唇などがのびやかになった感じで、全般的に以前は丸顔だったのに、面長になっていた。そして面長になった部分については、記憶の中の琴子叔母とそっくりだった。しかしよく見ると、額と目は同じといっても、目は子供のころのようにくるくる動かず、ねっとり輝いて、大人の目になっていた。

「明　ちゃん　かしら」

雪子はゆっくり、一言、一言区切るように言った。

「うん」

「よくわかったわね」

雪子がうれしそうな顔をした。

「うん、この間、この前を通ってね。アルプというのは琴のことだから、もしやと思ったんだ」

「お母さん、お母さん、明さんよ」

雪子がけたたましく呼びかけた。黒い服にハイヒールをはいた琴子がよちよちと出てきた。大分と肥えたために、踵の細い靴は彼女を纏足した中国婦人のような歩き方にした。

「アラ、いらっしゃい、しばらく。今日は急がないんでしょ、ゆっくりしてらっしゃい」

と言うなり、彼女は奥へひっこんでしまった。やりかけの仕事があったのかもしれないが、言葉やなごやかな微笑とは裏腹に、それが通り一遍の挨拶でしかないと、明は思った。

「ねえ、二階にいらっしゃいよ」

雪子が明の手をひっぱった。彼は店の女の子の目が自分に集っているのを意識して、それからのがれたい一心で、もぞもぞと靴を脱いだ。靴下の爪先に大きな穴があいて、黒い爪がのぞいていた。

それから、明と雪子の交際は復活した。琴子母子のことは明の家ではもう話題に上ることもなくなっていたから、今さら雪子と交際をはじめたなどと言えば、両親が意外に思い、何かと問いつめるにきまっているし、場合によっては、絶交しろと言われそうな気がして、明としては、家でそのことを口にすることはできなかった。幸い、琴子おばと明の家の間の往き来はもうなくなっていたから、そのことが彼の両親に知れる危険はまずなかった。雪子もその辺の事情をよくのみこんでいて、自分が明の家へ行くとか、電話をかけるということはしなかった。

最初の時は、明は雪子の部屋に二三十分いただけだった。彼女の部屋には、手製の人形とか刺繍したクッションの類が並んでいて、彼女の作品の展示場のような感じだった。雪子と話しながら、明はふと、疎開していた当時の彼女が押花を持っていたことを思い出した。それから、最後に別れた時、彼女は数珠玉の実を一つかみ持っていったはずだ。まだあんな物を持っているだろうか。

琴子おばはゆっくりしてゆけと言ったくせに、二度と顔を見せなかったし、明はもう来るまい、ここでは歓迎されざる客なのだ、と思おうとした。しかし雪子はお茶を運んでくれたし、ケーキを持ってきて、

「これ、あたしのお小遣いで買ったのよ」

とペロリと舌を出した。

「そんなことして、おばさんに叱られない？」
「いいの、お母さんなんか関係ないのよ。あたしのお小遣いですもの。どう使ったって構わないのよ」
　三年ぶりで会うと、共通の話題はほとんどなかった。
「こうなってから知ったんだけど、君と僕はいとこじゃないんだってね」
「そうなんですってね。でも今さらそんなこと言ったって、どうにもなりゃしないわよね」
「うん、大人は大人だよ。僕たちは僕たちさ」
　そう言いながら、明はかすかな良心の痛みを覚えた。そもそも雪子をたずねたについては、従妹が懐かしかったか、異性の友達が懐かしかったか、ということになると、明はあまり自信が持てないのだった。そのやましさのために、琴子の冷淡さがこたえて、二度とくるまいと思ったのだが、雪子から来週封切りになるアメリカの喜劇映画を見ないかとさそわれると断われなかった。
　映画館の中で、雪子はけたたましく笑い、それと一緒に上映された怪奇映画になると、明の左腕にしがみついてこわがった。雪子が感情をオーバーに表現しているような気がして、明は暗闇の中で顔を赤らめた。帰りに雪子は露地の奥のラーメン屋に案内してくれた。
「ここね、新宿で一番おいしい店よ」
　雪子は明の耳にそんなことをささやいた。彼女は三年ばかり会わないうちに、すっかり街の娘になっていた。新宿の隅々まで知っているのは勿論だが、飲食店などにはいって、勘定をする時の呼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.